平成 30 年 9 月 20 日　市長定例記者会見　会見録

【市長】
17 日は敬老の日でしたけども、田舎のお父さんお母さんに、ちゃんと何かメッセージを伝えしましたでしょうか。あの私は副市長、政策官共々、手分けして敬老会をはしごしたわけですけれども、今年 100 歳を静岡市民の方として迎える方、約 230 人いるんですよ。そのうち女性が 200 人、男性は 30 人しかいない、というショッキングな事実を知りました。
大坂なおみも然り、女性は強いなということをつくづく感じましたし、どこの敬老会の会場も女性が主流でしたよね。男性はその中で、小さく参加しているような雰囲気ですね。
まあ、最後にやはりどれだけ長く元気に生きるかっていうのが人間にとって一番大事なこと、そういう観点からすると、逞しいなというふうに思いました。これは、女性記者に対するエールであります。色々ガラスの壁、見えない壁、新聞社でもテレビ局でも日本の社会には、まだまだあるとは思いますけども、それを一つ一つ打ち破って是非活躍をして頂きたいな、ということをお願いします。

さて、今日の話題、まずはデビット・リスナール、フランスだとダビットって読むのかな、デビット・リスナール市長が、来月、姉妹都市「静岡市」を、これもまあフランスですね、奥様同伴で来静をされるということであります。
今回の来静は、静岡市の文化の理解を深めていただくとともに行政間のパートナーシップの強化を図ることを目的としています。行政間だけではなくてね、こう市民交流の活発化の起爆剤の来静にもしたいというふうに考えております。
二日間の短い滞在でありますけれども、静岡の地域文化、色んなところをお見せしたいな、と思いますし、市民のフランスとかカンヌに関心のある方を招いて、ウェルカムパーティーといいますか、歓迎レセプションもやっていきたいなと、今、原課を中心に、観光交流文化局を中心に準備をしているところであります。
詳しい日程については、また、決まり次第、お伝えをすることになるかと思いますので、ぜひ取材をよろしくお願いいたします。政策研究の覚書、これを交わすのも、今回の目玉の一つであります。
お互い行政分野で、得意なものがありますよね。例えば静岡市からは防災政策をカンヌ市に伝えるというのは、リスナール、ものすごい、その日本の災害対策というのに関心をもっておりますので、そのことについては、私どもからは、いろいろ今やっている静岡市の防災対策について情報提供していくと。　私たちからは、カンヌ国際映画祭を毎年受け入れると。世界中から観光客が集まる、カンヌ市の観光政策について、情報提供をもらって、我々の観光政策に色々活用していくと。そんなお互いの得意分野を持ち寄って、情報交換することによって、パートナーシップを強めていこう、という趣旨の政策研究に関する覚書であります。
そして、私が2年前そうだったんですけども、カンヌ市を訪れた後に、高松市と姉妹都市提携を結んでいるトゥール市で、日仏自治体会議というのが開かれたんですね。
トゥールでやったので、今度は熊本市で、日仏自治体会議というのをやります。

日本の自治体 1,700 くらい、今、ありますけども、フランスの自治体と何らかの形で、都市連携しているのが、約 80 あるんですね。そのうちの 33 の自治体が、今回の熊本市の日仏自治体会議に、集結します。
これは、外務省よりも総務省のクレア、自治体国際化協会という総務省の外郭団体があるんですが、そこが事務局を担っている会議で、2年ごとに日本とフランスと相互に開催をする、ということですね。それまで、実は、今回 80 のうちの 33 が参加するわけですけども、私が市長になる前は、あんまりそこに静岡市はコミットメントしてなかったですね、カンヌ市もそうだったですね。だけど、今回、日仏自治体交流会議にも、コミットメントしていこうということで、今回は静岡市からも、カンヌ市からも参加をするということなので、静岡市で滞在をした後、京都に立ち寄って、そして、リスナール市長一行は、熊本市の自治体会議に入るといういことです。それが 10 月の 10 日と 11 日、第6回日仏自治体交流会議ということであります。
分科会を3つ作ったのですけども、私、手を挙げましてね、「青少年のグローバルな人材育成」の分科会の座長を、務めさせていただくことになりました。
ロシアでワールドカップがあったじゃないですか。あの時、フランスの新聞メディアで大きく報道されたひとつは、日本の 16 強入りもあったけども、それよりも、サポーターが日本人は試合が終わったあと、観客席を、ごみを拾って、掃除をしてからスタジアムを後にすると、ここなんですよね。ここがすごく日本人はマナーがいいということで、際立っていたということで、随分、フランスのみならず、ヨーロッパで報道されたそうです。
なので、私もグローバルな人材育成というテーマを与えられて、プレゼンテーションするんですけども、良き国際人の一歩は、良き日本人になることと。日本のたしなみ、文化、あるいは日本人としての公共心とか道徳心、サムライスピリット、と言っていいのかどうかわかりませんけども、そういったものをまず、学校現場で教えていくということが、その日本人として、尊敬される、国際社会として尊敬される。ヨーロッパの鹿鳴館じゃないですども、真似ばっかりするんじゃない、というような教育をしていくということが大切なんじゃないかと。
実は、フランスは移民政策で随分苦労をしておって、今回のフランス代表、サッカーは強いわけですけれども、移民が多いわけですよね。ワールドカップの時には全部それが、フランス人になるけども、色々コミュニティが分断していて、非常に多文化共生で苦労していると。
そういう中での教育の役割というのは大事なので、日本というところはどういう人材育成しているのかと。
例えば、授業というか教育活動、学校の教育活動の一環として、日本の子どもたちっていうのは、掃除するんですね。掃除の時間というのは、皆さんも経験したと思いますけども、これがあるんですが、これフランスの感覚からすると、信じられないんですよ。掃除は、その学校の清掃を請け負っている業者さんが、市役所と同じようにやるというのが、あたり前なんだけども、そこのところを日本人は、子どもたちにさせる。それは、どういうことなのかと。ということは、それはやっぱりお互いさまということを、理解してもらう。誰かに気が付かないところで、綺麗にしてもらうお蔭で、勉強ができるということを、子どもの頃からしっかりわかってもらうために、掃除というものが、立派な教育活動になって

いるということは、非常に、フランスからみると、ユニークに見えるわけですけど、私たちとっては当たり前に受け入れてきたわけでありますね。
この頃は、保護者の中では、そんな掃除なんか子どもにさせるなという、そういう声もあると首都圏のある首長から聞きましたけども、私たちは、それを日本の美徳を養う上で大事だと、こんなプレゼンテーションを、私はしていくつもりであります。
10 月の6日と7日、10 日と 11 日と、詳細なスケジュールにつきましては、改めてお知らせいたしますので、報道機関の皆さんには、今回のカンヌ、リスナール市長の来静を報道していただくことで、歓迎をしていただき、今後の交流に弾みをつけていただきますよう、御協力をいただければと存じますので、よろしくお願いをいたします。以上であります。

二つ目は「海洋文化都市・清水を国内外に発信」という、テーマであります。これは昨日と、正式に投げ込みをしたのかな、プレスリリースをしたと思いますが、おかげさまで、3年後の 2021 年の国際深海生物学会の静岡市誘致に成功をしました。
これは、画期的なことであります。来年、清水港開港120周年になりますね。そして、将来的に、国際海洋文化都市・清水の建設という流れの中で、「千里の道も一歩から」という政策を打っていくわけですが、その中で、この有力な、あるいは将来の海洋文化施設が、立地される清水にふさわしい、国際会議を今回、誘致出来たというのは、大変嬉しく思っております。
これ、実はライバルがフランスのブレスト市だったんですよ。ブレスト市ってご存知ですか。フランスの一番西側の端、やっぱり港町なんですけれども、モンサンミッシェルの近くです。日本の自治体とは横須賀市、ジャムステックの本拠地があるところです、横須賀市の姉妹都市なんですね。ブレスト市と最終的には、一騎打ちになって、最後は会員の投票によって決まったわけでありますけれども。私たちは、ジャムステックを前に押し出して、そして誘致活動をしたんですね。今、手元にきておりますけれども、フランスの方も「イスナール」っていったかな。アルファベットで略称が書いてありますけれども、「イフレメール」だ「イフレメール」、フランス国立海洋開発研究所イフレメール。
ジャムステックに相当する研究機関ですが、ここが中心に次回ブレスト市で開催をとプレゼンテーションを行ったんですけれども。決め手になったのは、私たちの方が官民連携ができていたということであります。開催都市である静岡市の職員が現地に行って、ジャムステックの誘致活動を応援するべく、会場の外に即席の静岡市のPRブースというのを設けて、職員が中心になって、静岡市はこんな所だということを一生懸命PRしてくれたと。その熱意が、決め手になって、この学会の誘致というのは、今まで学会の関係者だけがやっていたわけですけれども、今回初めて、自治体が一緒になって乗り込んでって、そして、「ぜひ静岡へ清水へ」という運動を展開したのが、最終的に投票権を持っている研究者、会員の方々の心を打ったんではないか、という報告をもらっています。
そういう意味では、官民連携の一つの成果だなというふうに職員の頑張りに感謝をしつつ、皆さんには、胸を張って報告をしたいなというふうに思います。そんなこんなで、とにかく清水をクルーズ船の観光客も増えているということになって、ドンドンドンドン情報発信をしていきたいというふうに思っています。

秋には、「マグロまつり」。これは、夏に「みなとオアシス」って一つ仕掛け、「まぐろのまち清水」ということをキャッチフレーズにして、「みなとオアシス」を整備をしましたので、その流れの中で「マグロまつり」を、今年 12 回目少し盛大にやって行きますし、また、クルーズ船が来たらば、シャトルバスも無料で運行して、日の出から江尻とか、駅前銀座とか、清水の中心部に簡単にアクセスできるような、そんな工夫もしていくつもりであります。記者配付資料の中にそのあたりのところは、書いてありますけれども、付けてあると思いますので、その点のところを、ぜひ、また注目をしていただきたいなあと思いますし、来年の開港 120 周年に向けて、そういう機運を広めて行きたいと思います。
これは、また別途お伝えをすることになると思いますけども、「富士山コスプレ世界大会」、「富士コス」と愛好者の中では、略称で言われてますけど、この「富士コス」、今年 11 月にやって行きますし、またクリスマスのシーズンには、巴川のライトアップということも考えて、昼間はちょっと昭和の香りのする巴川縁ですけども、夜は非常に幽玄な雰囲気、リバーサイドとして何となく、ロマンチックな雰囲気がリバーサイトってあるわけですね。そこのところをライトアップ「光」で演出するということで、集客を試みていきたいというふうに思っています。そんなふうにして、とにかく国内外に清水の情報発信をしていくと。これは、さくらももこ先生も空の上から目を細めて、エールを送ってくれているんじゃないかな、というふうに思いながら、頑張っていきたいというふうに思っています。
来年は、清水港開港 120 年という節目の年です。積極的な情報発信、インバウンド客の受け入れなど、清水港を世界中から人の集まる港とすべく、着実に取り組みを進めていきます。以上です。

【司会】
はい、それでは、ただ今の発表項目について、ご質問がある方はお願いしたいと思いますが、ご質問の際は社名とお名前をおっしゃってからお願いしたいと思います。いかがでしょうか。

【朝日新聞】
この資料ですけど、清水区魅力づくり事業、清水港マグロまつりのやつで、ブース出展、それぞれ何を売るのか、ブドウだとかですね、フルーツなのか、どんなものを売るのか後で資料を出してもらえますか。

【市長】
はい、わかりました。これも清水に対してね、人を集める仕組みを整えておりますので、来年度、ご存知のとおり、中部横断自動車道が供用開始になりますのでね、山梨県や長野県の産物というのも清水に入ってくると。それを、少し先駆けて今回 PR ブースをどうぞ、と言ったらば、今回これだけの方々が集まってくれた、ということであります。これ、広報課長、何か補足はありますか。

【広報課長】
はい。資料の方は、また後ほど提出させていただきますが、これは従来、港のほうで進めていましたマグロまつりに清水区の魅力づくり事業が一緒にやるということで、これが、市長の言う局間連携

の一つの表れと思います。また、詳細はお知らせしたいと思いますので、よろしくお願い致します。

【市長】
今日は、清水区長は来ていないのかな。また、詳細は出しますので、よろしく PR をお願いいたします。

【司会】
他にいかがでしょうか。よろしいですか。
はい、それでは、続きまして幹事社質問のほうに移りますので、幹事社さんよろしくお願いいします。

【幹事社】
幹事社質問は、今回、「駿河湾フェリー」の一点です。
川勝知事は、駿河湾フェリー事業について「静岡市を含む3市3町で協力すること」で合意し、運航を継続すると発表しました。静岡市としては来年4月以降、具体的にどんな支援を行っていくことを検討されていますでしょうか。よろしくお願いします。

【市長】
今、申し上げましたとおり、インバウンドの拡大、交流人口の増加、いわゆる観光政策に力を入れて取り組んでおりますので、その基盤として駿河湾フェリーはなくてはならない社会的なインフラだと私は認識をしております。ですので、関係の自治体と一緒にこれを下支えをしていくということについて、取り組んでいきたいと思っています。

【幹事社】
ありがとうございます。
ちなみに、これからになるかと思うんですけど、これからお金の面で、どういうふうに3市3町で割り振っていくか、みたいなところを話し合われるかと思うんですけど、現時点で、静岡市としてはどのように声を上げていこうかな、とか今のお気持ちをお願いします。

【市長】
これは、まさにこれからの話でありますね。なので、とにかく公設民営の形で、これから駿河湾フェリーを継続していく、ということだろうというふうに思います。公共交通機関、もう一つのインフラだという前提に立って、これを公的にも支えていこうということですね。
ただ、静岡市は NPM、新しい公共経営ということを模索しておりますので、そこに民間のノウハウっていうのは必要なんですね。ですから、これからも駿河湾フェリーさんが運航するのならば、やはりソフト政策というのかな、前にもこの記者会見で申し上げましたけれどもね、どうしたら、1時間、清水から戸田までの時間を心地よく過ごしてもらえるか、単なる乗り合い船ではなくてね、クルーズ船

では、いろんなソフト施策、いろんな工夫をしていて、目線がやっぱり観光客も高くなっていますのでね。そういう営業努力というかな、まあ、こんなことはぜひお願いしたいなと思っていますし、私たちもそういうアイデアを提供していきたいなというふうに思っています。

【幹事社】
ありがとうございます。では、各社さん、お願いします。

【司会】
はい、どうでしょうか。ございませんか。
（静岡）朝日テレビさん、どうぞ。

【静岡朝日テレビ】
別件でいいんですよね。こども医療費の件で県は改めて、「政令市は対象外だよ」という姿勢を明らかにしまして、このままだと、静岡市と浜松市は他と足並みが揃わなくなるということなんですが、このことについての見解をお聞きしてもよろしいですか。

【市長】
これはやはり県知事の選挙の公約から始まった事業ですのでね、県全体のユニバーサルなサービスとしてお願いをしているというのが、静岡市の立場であります。

【静岡朝日テレビ】
今のままだと、でも、なかなか前に進まない感じがするのですが、いかがですかね。

【市長】
やっぱり今、マニフェストというのは大事だと思いますね。私も一番最初の選挙の時に、子どもの医療費の助成拡大ということをマニフェストに掲げて、財政的にはかなりのボリュームだったんですけども、なんとか中学生まで拡大を実施し、マニュフェストという選挙の時の有権者との約束を果たしました。
で、知事さんは去年の県知事選挙の時に、静岡市内でも、あるいは浜松市内でも、この高校生の医療費拡大ということを街頭演説で訴えておられました。報道の皆さんも、それをご存知の方もいらっしゃるかと思います。
それを聞いた静岡市民の皆さん、静岡県民の皆さま、浜松市民の方々もそうですけどもね、子育て中のお母さん方は、「ああ、それだったら県知事に一票入れる」という投票行動を取った方もいらっしゃるかと思います。
そういう、このマニフェストに掲げた、そして、静岡市内でも浜松市内でも、そういうことを訴えていたということを、ぜひ原点として、政治家として念頭に置いて制度設計を県の職

員に指示をしていただきたいというふうにお願いしたいと思います。

【司会】
よろしいですか。

【静岡朝日テレビ】
ありがとうございます。

【司会】
他にいかがでしょう。
朝日新聞さん、どうぞ。

【朝日新聞】
今、９月で、来年の春まで半年ぐらいになりましたけれども、市長は、いつどの時点で態度を表明されるんでしょうか。

【市長】
今、敬老会巡りで、たいへん多忙な日々を暮らしておりますけども、一日一日を大切に過ごしたいと思いますし、目前には９月の議会も控えております。今、さまざまな多岐にわたる論点を有する質問をいただいております。その答弁調整を一生懸命やっております。

【司会】
はい、読売さん、どうぞ。

【読売新聞】
ちょっと話題を変えまして。

【市長】
はい、ありがとうございます。
朝読の連携ってうれしいな、何か。

【読売新聞】
総裁選の街頭演説で、総理が来年の夏までに公立の全小中学校にエアコンをつけると。そのために補正を出すということで、だいたい規模感も出てきたと思うんですけども、ちょっと物理的な業者との契約とかの制約があると思うんですけれども、静岡市も来年度から３年間で、全公立の小中学校に設置するという計画については、総理のそういった、政府の意向

はあっても、基本的には変わらないというようなご認識でしょうか。

【市長】
変わらないと言うか、その総理の発言を朗報と受け止めて、期待をしたいと思っています。今、文部科学省から財務省に対しては、５千億という要求が行っているそうでありますけれども、おそらく全国から引く手あまたでね、このエアコン設置の要望はあると思うので、その中でね、静岡市、どれだけ取れるかというふうに準備を進めてるんですけど、その枠自体がね、大きくなれば、それは他の自治体にも大変ありがたいことですのでね、私たち125校ありますのでね、そういう意味でボリューム大きいですので、この総理の発言には期待したいと思っています。

【静岡放送】
リニアの話をお伺いしたいんですけれども、一昨日、宿舎の工事が、準備工事として着工したということなんですが、改めて、市長のコメントをいただきたいのと、今後、もちろん宿舎の着工の判断も重要な判断だとは思うんですけれど、これからさらに水問題も含めて、重要な判断、慎重に判断していかなければいけないタイミングが来ると思うんですが、その時、どのタイミングが一番、市として重要なタイミングだと考えているか、その２点をお願いします。

【市長】
はい、わかりました。
今、紙が回ってきましたけど、私、フェリー、土肥じゃなくて戸田って言ってしまったんで、土肥ですよね。すいません。言い間違えたということで訂正をいたします。
はい、それで、リニアの問題、２点質問をいただきましたが。

【静岡放送】
一点目が、改めて、宿舎の着工が始まったことに対してコメントをいただきたいのと、二点目は水問題も含めた今後どのタイミングが市の判断として重要なタイミングになるとお考えか、その２点です。

【市長】
私たちは、上流部の南アルプスにかかる部分の環境保全ということは大事にしております。もう一つ、中下流部の大井川の生活に関する水問題には配慮をしてほしい、ということを基本文書の中でも一文加えさせてもらっています。その2つの上流部と中下流部、それぞれの問題意識をもって、これからJR海と向き合っていきたい、というふうに思っています。
中下流部は、特に県が有識者会議を開いて、今年度中に一つの結論を得るということでありますけ

れども、私、JR東海と今回の基本合意に至って、様々な話し合いをしてきましたけれども、やっぱり、JR東海さんの方も 2027 年の開業に向けて、とにかく早くスピード感を持ちたいと思っていますので、そのあたりのところ、県との合意が早くできるように見守っていきたいなというふうに思っています。
中下流域の水の問題については。

【静岡放送】
静岡市から、こう、さらにJRに対して、それが上手くいくように今後も助言といいますか、話をしていくということはありますか。

【市長】
要請があれば。

【静岡放送】
要請というのはどちらから。

【市長】
県でもJR東海でも。

【静岡放送】
地元の流域の市町もということですよね。

【市長】
ただし、利水団体がああいう形で県に要望をして、県が今、カウンターパートナーとしてJR東海さんと交渉を進めているということでありますので、それを見守りたいというのが基本的な姿勢であります。どこかで合意点を見つけていただきたいな、ということを願っています。

【司会】
よろしいですか。
はい、他にいかがでしょう。
中日新聞さん、どうぞ。

【中日新聞】
バスケットボールの事なんですけど、B3のチームが誕生したんですけど、B3に準加盟をできた理由っていうのが、市のバックアップが明確にあるということだったんですけども、でも、チームに聞いたら具体的にどう支えてもらうのか、まだわからないという話だったんですけど、現時点で、どういう支援、アリーナの優先使用権とか、そういったものがあると思うんですけど、市としてはどういう支援

をしていきたいな、というのはありますか。

【市長】
アリーナの優先使用権って、もう先走った話ですので、そこまでは答えることはできませんけれども。しかし、スポーツを通じたまちづくりということに対して、静岡市は今、これも交流人口の拡大という観点から力を入れているのはご承知のとおりであります。ローラースポーツという新しい五輪種目になった、今までマイナーだったスポーツに光を当てて、東静岡（駅）の前に公共施設としてローラースポーツパークを整備したのも、その一環であります。
バスケットは、サッカーや野球と並ぶ子供たちにとっても競技人口の多い種目でありますので、そのバスケットで民間からこういう動きがあるということは、私たちにとっては歓迎すべき市民運動でありますので、それを私たちは下から支えていきたいな、というふうに思っています。
また、心の公共財なんですね、地元にプロチームがあるということは。やっぱり、アジア大会でもやはり、日本選手が活躍することによって、「日本、頑張れ」という心が一つになるだろうし、オリンピックは、まさにその最たるもの。ワールドカップもそうだったし、あの時はもうみんな愛国者になり、日本代表を応援するわけですよね。同じように、やはりエスパルスで静岡の人がみんなで心を一つにして応援をするという地元プロスポーツチームには、すごい力があると思います。ヴェルテックスというチーム名も決まったバスケットに関係のある方々、市民だけではなくてね。多くの市民にエキサイティングなスポーツの醍醐味を知っていただき、それを通じて静岡ヴェルテックスを通じてね、みんなで、このヴェルテックスを応援することによって、また、市民の心が一つになるような、静岡を愛する気持ちにつながるような、そんなことになるならば、心の公共財でありますので、それを支援をしていきたいな、と思っています。

【中日新聞】
じゃあ、まだ具体的にどういう支援かは決まっていないと。

【市長】
はい。

【司会】
いかがでしょうか。
朝日新聞さん、どうぞ。

【朝日新聞】
市長、若い頃、自民党員で自民党からも出ていたと思うんですけれども、議員として。
確認したいんですけれども、今は党員じゃないんですよね。

【市長】
そうです。今は首長の立場ですので、党籍はありません。
はい。

【司会】
よろしいですか。
はい、静岡新聞さん、どうぞ。

【静岡新聞】
リニアの関係にちょっと戻らせていただきたいんですけれども、この前、林道の許可を出された時に、市長がコメントで「今回は準備工事であり、水問題に直接の影響がないもの」というふうにコメントを出されていると思うんですが、今、会見の中で、「県との合意が早くできるように見守っていきたい」ということもおっしゃっていると。これから、どのくらい先になるかわからないんですけれども、本体工事が着工になるというタイミングがあると思うんですけれども、今の発言から聞くと、本体工事の林道許可、使用許可っていうのは、県との合意がなければしないという認識でいるということでいいんでしょうか。

【市長】
そうではないですね。
私たちは私たちで JR との合意文書に従って、一つ一つの案件について判断をしていきたいと思っています。

【静岡新聞】
となると、県とJRが合意する前でも、本体工事をJRがやると言った時に、林道の使用許可を出す可能性があるっていうことですか。

【市長】
おっしゃるとおりです。

【静岡新聞】
ありがとうございます。

【司会】
はい、どうでしょうか。

【市長】

その大前提として、重ねて申し上げますけども、県とJR東海がこの中下流域の水問題についても、合意に達してほしい、ということを強く願っております。
交渉事ですからね、10 対0ってことはないと思うんですね。私たちもJR東海さんと、お互い立場はあるけれども、譲り合って合意文書にこぎつけたということですので、県のほうにも、そういう努力を、JR東海にもそういう努力をお願いしたいと思います。

【司会】
はい、それでは以上で本日の定例記者会見を終了させていただきます。
次回、10 月1日、月曜日の午前 11 時からとなりますので、よろしくお願いいたします。
ありがとうございました。